胡適によるジョン・デューイ思想の受容と展開
──「実験主義の信徒」として──

*山　下　大　喜

はじめに
１　アメリカ留学を通じた西洋知の受容と展開
２　胡適とデューイの思想的関係
（１）デューイとの接点
（２）デューイ訪中と胡適による紹介
３　「実験主義の信徒」としての自覚
（１）思想文芸と政治　─「不談主義」の転換─
（２）「問題と主義」論争
おわりに

はじめに

2017年改訂の学習指導要領では，構造化された三つの柱をもとに「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「学びに向かう力・人間性等」が「育成すべき資質・能力」として明記された[(1)]。このようなコンピテンシー志向のカリキュラム改革は，世界的潮流としてその動きが顕著になる一方で，各国ではそれぞれの状況に応じた独自的展開が存在する[(2)]。

例えば，台湾では，1990年代を契機とした民主主義の成熟とともに，知識偏重による硬直化したカリキュラム政策を転換させ，「課程標準（Curriculum Standards）」から「課程綱要（Curriculum Guidelines）」へ大綱化された[(3)]。2014年に公布，2019年から順次実施されている「十二年国民基本教育課程綱要」はこの系譜を受け継ぎ，その中心には「核心素養（Core Competency）」がコンピテンシー志向の鍵概念として明記されている。ここで着目すべきは，「十二年国民基本教育課程綱要」の冒頭にある「修訂背景」に，「1929年（民国18年）にナショナル・カリキュラムの規範を定め，それ以後，数次にわたって改訂を重ねてきた」と記されている点である[(4)]。ここでいう1929年とは南京国民政府が北伐の完了によって「中国」再統一を果たした時期でもある。「中国」再統一の過程において，南京国民政府は「国内的承認と国際的承認をいかにして獲得するのか」という「北京政府に取って代わるだけの正当性の根拠を示す必要があった」[(5)]。実際に，蔡元培（1868-1940）は北京政府の教育部が官僚化し腐敗していたと記すほどであった[(6)]。こうした歴史的視点では北京政府での教育政策が射程に含まれず，厚く叙述されないことになる。しかしながら，北京政府は軍閥割拠など難しい政治状況にありつつも，教育近代化に向けた学校教育制度の整備が模索されていた。その大きな成果の一つといえるのが，国際的な新教育運動を背景に制定された壬戌学制（1922年新学制）である。

以上の背景をふまえ，本稿では，壬戌学制の制定で中核的な役割を果たした胡適（1891-1962）の思想を取りあげる。具体的には，五四時期の教育改革に制度設計の面から携わるにあたって，胡適がJ. デューイ（1859-1952）からの思想的影響としてその方法に重要性を求め，「実験主義の信徒」[(7)]としての自覚をもつに至ったことを明らかにする。

胡適は1915年から1917年までコロンビア大学でデューイに師事した。アメリカ留学から帰国後には北京大学へと赴任し，雑誌『新青年』を拠点に新文化運動をけん引する。加えて，壬戌学制など五四時期の教育改革では制度設計の面から大きな役割を果たし

* 元名古屋大学大学院学生

た[8]。席雲舒は，胡適が（一）中国伝統的な考証学，（二）T. H. ハクスリーの進化論，（三）デューイの実験主義哲学の三つから共通点を見出し，それを自らの基礎としたとしている[9]。留学時代に師事したデューイからの思想的影響については，胡適自身も留学日記の出版に際した序文（1936年）において，自らの基礎はデューイの実験主義によるところが大きいと記すほどであった[10]。胡適の文意では，デューイが好んでPragmatismを用いなかったので，その訳語の「実際主義」ではなく，代わりにExperimentalismの訳語である「実験主義」が哲学体系をあらわす総称として使われている。本稿でもこの文意に沿って実験主義の語を用いることにする。これまでも諸研究により，胡適はデューイからの思想的影響としてその方法を繰り返し強調していたことが明らかとなっている[11]。その一例として，デューイが中国滞在を終え，アメリカへ帰国の途についた日（1921年7月11日）の日記に，胡適は中国においてデューイを真に理解している人は実際に少ないとして，故にデューイを深く理解するためにはその方法に留意してほしいと記している[12]。

このように胡適が方法に重要性を求めたことについて，小林文男は，胡適が一つの方法として中国の学術研究に適用し，方法の強調は同じくデューイのもとで学んだ陶行知（1891-1946）と共通するとしている[13]。余英時は，胡適がC. ダーウィン（1809-1882）の進化観念を受け継いでいる点に実験主義の優位性を見出し，新ヘーゲル主義の影響下にあった初期デューイを放棄したとしている[14]。この指摘は受容主体としての胡適によるデューイ理解を考察するうえで重要なものである[15]。1920年代の教育改革においてアメリカからの影響が指摘されるのは，阿部洋が論じるように，アメリカ留学経験者の活躍に加えて，デューイ，P. モンロー（1869-1947），W. H. キルパトリック（1871-1965）などアメリカを代表する教育学者の訪中が実現したことによる[16]。その当事者の一人として，胡適は余英時が指摘したデューイ理解を背景に壬戌学制の制定に参画していたと考えられる。長谷川豊は，新思潮が次々ともたらされた五四時期であったからこそ，胡適は「実験主義の信徒」として自らの思想的営為を展開させていったとしている[17]。しかしながら，従来の諸研究では，胡適がデューイからの影響としてその方法に重要性を求めるようになった点とそこにいかなる背景があったのかについて，十分な考察がなされていると言い難い。

当該時期の教育改革におけるアメリカからの影響について，その基底をより克明とするためには制度設計に携わった人物がアメリカを代表する教育思想をどのような射程でとらえ，いかなる思想状況のもとでその影響が自覚的なものになったのかが重要となる。師事を含む留学経験やアメリカからの訪中の事実だけでは不十分である。胡適を例にしても，アメリカ留学を通じてデューイ思想を選択的かつ相対的にとらえ，マルクス主義との論争関係を含む五四時期の思想状況のなかでデューイからの影響が自覚的なものとなった。五四時期の教育改革において，胡適は学制や課程標準綱要など学校教育の根幹にかかわる制度の設計に大きな役割を果たした。そのため，胡適によるデューイ思想の受容とその自覚に至るまでの展開は，アメリカからの影響を構成する思想的基底を考察するうえで，中国近代教育史研究としても重要な意義を有するといえる。

以下，第1節では，胡適とデューイの関係性を一例に，留学経験が西洋知の受容と展開に果たす役割を提示する。第2節では，胡適がいかなる形でデューイとの接点をもち，その接点のもち方が胡適のデューイ理解にどのような影響を与えたのかについて考察する。そのうえで，第3節では，五四時期の思想状況を背景に，胡適が「実験主義の信徒」としてデューイの方法に重要性を求めるようになったことを論じていく。

1　アメリカ留学を通じた西洋知の受容と展開

近代東アジアにおいて留学経験者による西洋知の受容は近代国民国家の建設に向けた動きを下支えするものであった。本稿で取りあげる胡適は1910年から義和団事件の賠償金返還による公費留学でアメリカに渡り，1915年から1917年にコロンビア大学でデューイに師事した。以上の背景をふまえ，本節では，アメリカ留学を通じた実験主義の受容とその後の中国国内での展開との関係性を提示する。

胡適のアメリカ留学は1910年9月からコーネル大学に始まり，1915年9月からはコロンビア大学でデューイに直接師事した。欧陽哲生が論じるように，新文化運動の拠点となった『新青年』において，陳独秀（1879-1942），魯迅（1881-1936），周作人（1885-1967），銭玄同（1887-1939），李大釗（1889-1927）が日本留学経験者であるのに対して，胡適のようなアメリカ留学経験者はごく少数であった[18]。胡適にとってアメリカ留学とは思想形成の基盤であると同時に，自らの思想を語るうえでの重要な一要素として自覚されるようになった。ここで，アメリカ留学が果たした役割を読みとくため，以下の二点に着目したい。

第一に，西洋知の受容に際して留学が果たした役割である。西洋知の受容は留学を介することが多く，それ故に留学は近代的な国家建設を担う人材の育成のために不可欠な事業として位置づけられた。平野健一郎は国際文化論の視座から文化受容における留学生の役割を「文化運搬者」と位置づけている[19]。本稿で取りあげる実験主義の受容と展開も，平野による「文化運搬者」の枠組みがあてはまるといえる。コロンビア大学で学んだ中国人留学生は，胡適のみならず陶行知，郭秉文（1879-1969），陳鶴琴（1892-1982），蔣夢麟（1886-1964）など多数存在した（下記の図１参照）。いわば，デューイ訪中の準備はコロンビア大学への留学経験者が中心となって進められた。こうした留学経験者が媒介として機能したことにより，実験主義が広く中国国内へ伝播していくことになったのである。

第二に，西洋知の受容と「翻訳」との関係についてである。西洋知の受容は，その多くが留学生の「翻訳」を通じて行われるものであり，そうして初めて本国へともたらされるのである。齋藤希史が論じるように，こうした「翻訳」によって「伝統的な知や文体は放棄されたのではなく」，「新たな要素が加えられ，全体が組み換えられ再編されて，新たな知や文体が形成された」とすることができる[20]。胡適を例にしても，アメリカ留学から帰国後に自らの講演で実験主義を語り，帯同したデューイの講演会では自らその通訳を務めた。ここに胡適による「翻訳」をみてとることができる[21]。

この胡適による「翻訳」をめぐって，これまで様々な議論がなされてきた。1950年代半ばでは，徹底した階級闘争の一環として胡適への批判運動が展開され，胡適が実験主義を「曲解」しているとまで評された[22]。1980年代を皮切りにデューイを含め再評価が進み，そうした評価はみられないものの，「翻訳」における「等価」に着目し，現在もなお胡適が実験主義を「誤読」，「誤訳」していたと指摘する研究がある[23]。

しかし，胡適による「誤読」や「誤訳」を指摘する研究には大きなパラドクスを含んでいる。いわば，文化受容における「翻訳」は受容側の文化体系により選

杜威博士及夫人參觀上海申報館攝影

胡適　蔣夢麟　陶知行　張作平
才量史　杜威夫人　杜威

図１　デューイ夫妻との集合写真（上海）
（所収：『新教育』第１巻第３期，1919年５月）

択的かつ相対的にならざるをえないため，ここに翻訳元の言語との「等価」を要求してしまえば，その多くが「誤読」や「誤訳」になりかねないのである。功利主義を例に，佐藤豊は「近代化にともない，この西洋起源の思想も受容されることになるのだが，このことは必ずしも西洋で持っていた価値をそのまま受容したことを意味」せず，それは「文化が受容されるとき，常にその文化体系によるフィルターを通して選択的に行われ，体系内の諸要素と通時的・共時的な比較によって，その価値が相対的に決定されるからである」としている[24]。ここで述べられているように，「翻訳」は受容主体のフィルターを通じた選択的かつ相対的な営みであるため，西洋知との等価的関係は成り立たないのである。中国人留学生は各々が中国的背景を有しており，そのうえで西洋知と出会う。胡適を例にしてみれば，余英時が論じるように，中国的背景のなかでも，とりわけ考証学的背景をもとにデューイへと接近していった[25]。実際に，清朝考証学を代表する戴震（1724-1777）の再評価を通じて，胡適は演繹と帰納を総合化する科学的精神を清朝考証学に見出そうとしていた[26]。すなわち，あくまでもデューイの全てを等価的に受容したのではなく，胡適はアメリカ留学経験を通じてデューイとの接点をもち，その体系を選択的かつ相対的にとらえていったのである。

2　胡適とデューイの思想的関係

まず２―（１）では，胡適がコロンビア大学に進学するに先立って，いかなる形でデューイとの接点をもったのかについて示す。そのうえで，２―（２）では，デューイ訪中直前（1919年春季）の胡適による講演録をもとに，胡適がデューイの思想的展開をいかにとらえていたのかについて考察する。

（1）デューイとの接点

胡適は1912年春学期からコーネル大学の文学院で哲学を専攻した。1915年９月にコロンビア大学へ進学するまでコーネル大学のあるイサカで過ごした。胡適はコーネル大学の文学院で哲学の授業を多く履修していたが，いかなる形でデューイとの接点をもったのであろうか[27]。その接点として以下の二点をあげることができる。

第一の接点として，コーネル大学の哲学教員たちが実験主義を批判していたことから，デューイの著作を体系的に読むようになったことがあげられる。胡適による晩年の『胡適口述自伝』によれば，当時コーネル大学の哲学教員たちは「新唯心主義（New Idealism）」に傾倒し，実験主義を批判していたという[28]。ここでの「新唯心主義」とは，「客観唯心論（Objective Idealism）」とも呼ばれ，G. W. F. ヘーゲル（1770-1831）の影響を受けたイギリスの思想家 T.H. グリーン（1836-1882）からの系譜によるものであったと胡適は記している[29]。すなわち，当時アメリカで形成されていた新ヘーゲル主義の影響からコーネル大学では実験主義が批判され，デューイもその対象となっていた。このコーネル大学内での批判をきっかけとして，胡適は次第に対象となっているデューイの思想そのものに関心をもち，C. S. パース（1839-1914）と W. ジェームズ（1842-1910）はすでに亡くなっていたため，デューイをそれに続く「実験主義の中核的存在」とみなして著作を体系的に読むようになったのである。

第二の接点として，コーネル大学地質学教授の次女 E. C. ウィリアムズ（1885-1971）を介したものがある。アメリカ留学期の胡適にとってウィリアムズは情操的支柱であり，多くの書信を互いに交わしている[30]。胡適がウィリアムズと出会い，書信を頻繁に交わすようになった1914年から1915年にかけてはまさしく第一次大戦下であり，胡適はコスモポリタンな国際主義を各地の講演で説いてまわっていた。しかし，各地での講演活動を熱心に取り組むがあまり，コーネル大学における学内の奨学金に落選してしまった[31]。ここで改めて専門的な哲学研究へ専念することの重要性を感じた胡適は，1915年５月28日の日記において，互いの専門分野に全力を注ぎ，これ以後は東洋と西洋の双方の哲学を専門として万事を尽くすことをウィリアムズと誓ったと記している[32]。そうしたなかで1915年８月４日のウィリアムズにあてた書信には，コロンビア大学へ進学することに加えて，ウィリアムズに教えてもらった『アトランティック』と『ニュー・リパブリック』にあるデューイの論説を興味深く読んだと記している[33]。後の留学日記出版に際した序文で，胡適はデューイとの接点として，1915年夏休みにデューイの著作を読みあさるようになったと記している[34]。そのきっかけの一つは哲学研究へ専念することを誓ったウィリアムズからの紹介によるものであったといえる。

（2）デューイ訪中と胡適による紹介

胡適は1917年５月に博士論文の審査を終えた。アメリカ留学中は口語文学の確立を目ざす文学革命が学友との中心的議題であった。そのため，晩年の『胡適口述自伝』にはコロンビア大学在学中にデューイの「論理学之宗派」と「社会政治哲学」を履修したことなど

多くの記述がみられるが，在学中の同時代史料に胡適によるデューイについての体系的な記述をみることはできない[35]。パース，ジェイムズを含めた形で，胡適が初めて総説的に実験主義を論じたのはデューイ訪中直前の1919年春季のことであった。

デューイがコロンビア大学からの在外研究期間を活用して日本へと赴いたのは1919年２月のことである。日本への招聘にあたっては日本興業銀行副総裁の小野英二郎の役割が大きく，渋沢栄一もその資金的援助に加わっていた[36]。東京帝国大学ではデューイの連続公演が展開され，それらは後に『哲学の改造』の基盤となった。こうしたデューイの日本訪問の情報を受けて，陶行知は1919年３月12日に胡適へあてた書信で，デューイに訪中を要請すれば，６割か７割の確率で中国へ来てくれるであろうとしている[37]。すなわち，コロンビア大学に留学経験がある郭秉文が東京で実際にデューイへと接触し，胡適は陶行知を通じてデューイ訪中が実現しそうであることを知らされていたのである。ここで，胡適はデューイ訪中に備えて，各地の講演でパース，ジェイムズ，デューイの思想体系を論じ，その講演録は『新青年』第６巻第４号（1919年４月），『新教育』第１巻第３期（1919年５月），『新中国』第１巻第２号（1919年６月）に収録された[38]。一連の胡適による講演録がそれぞれ主要誌へ収められたことは反響をもって実験主義が広範な読者層へ行き届いたことを意味している。そうした講演録のなかから，胡適がデューイの思想的展開をいかにとらえていたのかについて，以下の二点に着目したい。

第一に，胡適が実験主義の思想的系譜をダーウィン以来のものであると位置づけている点である。19世紀後半のアメリカ哲学界においてダーウィンの著作が大きな反響をもって受け入れられたことは周知の通りである[39]。胡適は科学史にとって19世紀は精緻な方法論をつくり上げた華々しい時代であり，そうしたなかで登場してきたダーウィンの進化論は実験主義と極めて重要な関係にあるとしている[40]。ダーウィンの主著である『種の起源』が出版されたのは偶然にもデューイが生まれた1859年と同年であり，出版50周年にあたる1909年にデューイは「ダーウィンと科学に対する彼の影響」と題した講演を行なっている[41]。こうした背景をもとに，胡適は，実験主義の系譜について，ダーウィンの進化観念を初めて哲学へと応用し，その結果として「歴史的態度（The Genetic Method）」[42]を発生させたものであると位置づけたのである。

第二に，デューイの思想的展開のなかでも，シカゴ大学期以降を射程におきながら胡適がデューイ思想を論じている点である。実際に，胡適の講演録をみれば，デューイについての記述の全てがシカゴ大学期以降を射程においたものであることがわかる。『新教育』での「デューイ哲学の根本観念」の冒頭では，「実験主義の中核的存在」であるデューイの重要文献として『学校と社会』などシカゴ大学期以降のものが列挙されている[43]。『新中国』での「デューイの思想論」では，デューイの目的はどのように「創造的知性」を養うのかにあり，なかでも重要となるのが「仮説」であるとしている。さらに，『思考の方法』と『民主主義と教育』を参照しながら，反省的思考の五段階（①判断しがたい状況に出会う，②解決困難な点を見定める，③解決方法を仮定する，④適用する仮説を決定する，⑤証明する）について論じている[44]。『新教育』での「デューイの教育哲学」では，デューイが哲学は広義的には教育哲学であると常に述べていたとしつつ，その点と密接に関わるものとして『民主主義と教育』の第25章「認識の理論」と第26章「道徳の理論」を取りあげている[45]。そして，『民主主義と教育』がデューイの教育哲学を代表する著作であるとして，デューイの教育哲学が果たした最大の貢献は階級社会から伝わってきた教育理論と教育制度を改革し，教育を通じて民主主義社会の真の担い手となる市民を育成しようとしたことにあるとしている。

以上を総合すれば，胡適が取りあげているのは，デューイの思想的展開のなかでもシカゴ大学期以降のことであり，『民主主義と教育』を教育哲学の中核においている。コーネル大学内の実験主義批判がデューイとの接点であったことから，胡適がデューイをとらえるにあたって，その射程にシカゴ以前の初期デューイは含まれていなかった。すなわち，前述した点と合わせれば，いかにデューイと接点をもったのかが影響して，胡適はダーウィニズムとの関連に実験主義の優位性を見出し，初期デューイが観念論的で新ヘーゲル主義の影響下にあったことを放棄することになったのである。

3　「実験主義の信徒」としての自覚

デューイが上海に到着した数日後に北京で五四運動があり，胡適は大きな政治思想的変動に直面する。そこで，まず３―（１）では，閉塞的な議会状況を目の前にして，胡適が新文化のために思想文芸の解放を優先させ，政治問題を語らないという「不談主義」を転換させたことを示す。そのうえで，３―（２）では，李大釗との「問題と主義」論争を取りあげ，胡適がデューイからの思想的影響としてその方法に重要性を

求め，その結果として「実験主義の信徒」としての自覚をもつに至ったことを論じる。

（1）思想文芸と政治　―「不談主義」の転換―

胡適はアメリカ留学中に限ってみても，様々な活動を通じて政治へ深い関心を寄せていた。実際に，胡適が世界学生会（Cosmopolitan Club）の活動を通じてアメリカ政治と深くかかわるようになったのは，コーネル大学での1912年春学期以降のことである。1912年10月30日に，世界学生会でアメリカ大統領選挙の模擬投票が実施され，胡適は日記に模擬投票について自らの分析を記している[46]。そのうえで，同年11月５日と６日には実際の大統領選挙の投開票が行なわれ，日記にその結果と民主党の W. ウィルソン（1856―1924）が勝利したことを記している[47]。胡適は中国人留学生と政治研究会を立ち上げるなど，次第に世界学生会の活動を熱心に取り組むようになった[48]。1913年５月から１年間は世界学生会の会長に選出され，各地の講演会では会長の胡適自らコスモポリタンな国際主義の重要性を説いてまわった[49]。このように，胡適はアメリカ留学を通じてウィルソンに代表される革新主義的なアメリカ政治を密に体験し，自らも講演活動を通じてコスモポリタンな国際主義を体現してみせたのである。

しかしながら，アメリカ留学から帰国した胡適は政治との距離をとり，政治問題を談じないという「不談主義」を採用した。それは，当時の中国において出版界や教育界が静まりかえる様子をみたからであり，思想文芸の解放を通じて豊かな新文化を打ち立てることが政治改革の基盤になると胡適は考えたからである[50]。そこで，胡適は新文化運動の推進を優先させるため，ここ20年は政治問題に深入りしないことを決心したのであった。ただし，胡適による「不談主義」はあくまでも暫定的なものであったことに留意しなければならない。すわなち，20年も待たずに暫定的な「不談主義」は，以下にある議会状況を目の前にして転換を余儀なくされることになるのである。

1919年６月に軍閥政府を批判するビラを撒いていた陳独秀が警察に逮捕された。胡適は新文化運動をともに牽引した友として陳独秀の救出活動を展開することになる[51]。当時の議会状況として，段祺瑞の影響下にある安福倶楽部が圧倒的多数を占めていた[52]。知識人が具体的な政治問題に口を閉ざさないといけない状況を目の前にして，胡適は政治問題を談じない訳にはいられないと考えるに至ったのである。これに加えて，胡適はマルクス主義へと傾倒する知識人と論争関係になっていた。あくまでも暫定的であった「不談主義」を転換するにあたり，マルクス主義との論争関係が重なることで，胡適は「実験主義の信徒」としての自覚をもって自らの政論を展開していく[53]。その端緒となったのが，1919年７月から『毎週評論』で展開された李大釗との「問題と主義」論争であった。

（2）「問題と主義」論争

ここで本論の冒頭で引用したデューイがアメリカへ帰国した日（1921年７月11日）の日記に再度着目したい。胡適はその日の日記において，デューイを真に理解するためにはその方法に留意しなければならないとした。これとは別に記した「デューイ先生と中国」（1921年７月）において，胡適はデューイが中国滞在中に最も注力したのが教育の革新であったとしつつ，「デューイ先生は共産主義，無政府主義，自由恋愛といった類の特別な問題に関する特別な主張」ではなく，「私たちに哲学の方法を与え，その方法を用いて私たち自身の特別な問題を解決させようとした」と記している[54]。

デューイ帰国に際して，この「デューイ先生と中国」においても，胡適はデューイからの影響としてその方法を強調している。同論文の末段では，「特別な主張」の応用は有限であるのに対して，「方法」の応用は際限がないとまで記している。では，なぜ胡適はこれほどまでに方法を強調するに至ったのか。この問いを読みとくうえで重要となるのが胡適と李大釗との間で展開された「問題と主義」論争である。

この「問題と主義」論争は，1919年７月に『毎週評論』へ掲載された胡適の論文をきっかけに展開されたものである[55]。主たる論争相手となった李大釗は日本留学経験を背景にマルクス主義を受容した人物であり，『新青年』第６巻第５号（1919年５月）と第６巻第６号（1919年11月）に掲載された「私のマルクス主義観」は中国で初めてマルクス主義理論を体系的に紹介した論説として位置づけられている[56]。この論争において，胡適は個別具体的な問題の研究に時間を費やすべきであり，主義をむやみに談ずるべきではないとした。いわば，共産主義や無政府主義といった「特別な主張」の類のものは主義として主張し始めると，抽象名詞へと様変わりしてしまう。胡適はこの点に主義をむやみに談ずる弱点と危険性があるとして，主義を高々に語ることに対して「目的熱」と「方法盲」に陥ってしまっていると厳しく批判したのである[57]。胡適にとって新思潮とは批判的態度をもってして「問題の研究」と「学理の輸入」をするためのものであり，文明の再構築にあたっては一足飛びの体制変革を求めるの

ではなく，個別具体的に一つ一つの問題を解決していくことが重要であると説いた[58]。このようなマルクス主義との論争関係という思想状況によって，胡適は自らのよりどころになるデューイからの影響としてその方法に重要性を求め，その結果として「実験主義の信徒」としての自覚をもつに至ったのである。

同じくして，胡適は実験主義の系譜が弁証法と互いに相容れないものであると記すようになった。その背景として，マルクス主義の影響から『新青年』が陣営分化の状態へとなった点があげられる[59]。『新青年』は陳独秀により創刊され，北京大学教授陣を編集基盤に迎え入れることで次第に発行部数を伸ばしていった。しかしながら，『新青年』執筆陣の思想的背景は元から一様ではなかった。マルクス主義の影響が強まり，陳独秀が1920年年初に上海へ移り，編集基盤が北京を離れると，『新青年』は陣営分化の様相を呈すようになった。すなわち，章清が論じるように，「『新青年』は同人雑誌であったけれども，思想的背景と価値は完全に一致していなかったため，雑誌の成長とともに政治問題に直面すると，分裂傾向が表面化していった」のである[60]。そのような状況をふまえて，胡適は，自らに思想的影響を与えた二大人物としてハクスリーとデューイをあげながら，実験主義は「生物進化論が世に出たのちの科学的方法」であるから，「生物進化論成立以前の形而上学」である弁証法は実験主義と根本的に相容れないとしている[61]。そのうえで，一足飛びに目的地へ行くのではなく，一つ一つの不断な改良こそが真に信頼できる進化であるとした。胡適がこのように記したのは，陳独秀が実験主義と弁証法の唯物史観を連合戦線として合作させようとしたからである。マルクス主義との論争関係も相まって，胡適は一足飛びに体制変革を求めるようなものと親和性を持ちえないことを示すため，実験主義と弁証法が互いに相容れないものと論じるようになったのである。

おわりに

本稿では，五四時期の教育改革において制度設計の面から中核的な役割を果たした胡適の思想を取りあげた。当該時期はアメリカからの影響が指摘されるが，胡適はいかなる思想的背景をもって制度設計へと携わったのか。以上の考察をふまえ，胡適によるデューイ思想の受容と展開について，その特質を以下の二点に見出すことができる。

第一に，胡適がシカゴ大学期以降を射程におきながらデューイをとらえていた点である。従来においても胡適による実験主義の受容は多くの研究で論及されてきた。胡適がデューイに学んだのは1915年から1917年にかけてのコロンビア大学である。胡適はコロンビア大学へ進学するに先立ち，新ヘーゲル主義の影響下にあったコーネル大学内での実験主義批判をきっかけにデューイとの接点をもった。このことをふまえれば，胡適がデューイをとらえるにあたって，その射程に新ヘーゲル主義の影響下にあったシカゴ以前の観念論的な初期デューイは含まれないことになる。実際に，デューイ訪中にあたって行なわれた胡適による一連の講演録をみれば，デューイについての記述はその全てがシカゴ大学期以降のものであり，『民主主義と教育』がデューイの教育哲学を代表する著作として位置づけられている。さらに，胡適はダーウィニズムとの関連に実験主義の優位性を見出し，実験主義はダーウィンからの系譜における科学的方法であると主張した。総じて，胡適にとってデューイの思想的展開とは主としてシカゴ大学期以降のものであり，そうした射程を基盤として，文学史や哲学史など多岐にわたる研究を展開し，壬戌学制の制定など制度設計の面から五四時期の教育改革に深くかかわっていったのである。

第二に，胡適が「実験主義の信徒」としての自覚をもつに至った背景として，「不談主義」の転換やマルクス主義との論争関係が関連している点である。アメリカ留学から帰国した胡適は政治問題に対して「不談主義」を心に決めていた。それは思想文芸の解放を優先的に取り組むことが政治改革の基盤になりうると考えたからである。しかしながら，知識人たちが具体的な政治問題に口を閉ざさなければならない状況を目の前にして，胡適は暫定的な「不談主義」を転換させることになる。ここに中国思想界におけるマルクス主義の影響の強まりが重なることで，胡適は「実験主義の信徒」としての方法論的自覚をもつようになった。その端緒として位置づけられるのが李大釗との「問題と主義」論争である。この論争において，胡適は主義をむやみに談ずるのではなく，個別具体的な問題の研究に時間を費やすべきと主張し，主義は「目的熱」と「方法盲」に陥っていると厳しく批判した。五四時期に自身がおかれた思想状況のなかで，胡適はデューイからの思想的影響としてその方法に重要性を求め，その結果として「実験主義の信徒」としての自覚をもつに至った。言いかえれば，政治問題と距離をとっていた胡適が教育改革の制度設計に尽力したのは「不談主義」の転換によるところが大きく，デューイからの影響が指摘されるのは胡適がマルクス主義との論争関係を背景に「実験主義の信徒」としての自覚をもつに至ったからであるといえる。

胡適自身にとってデューイからの思想的影響は晩年につれて強く意識されるようになった。実際に，晩年に台湾へ移った後も胡適はデューイについての講演を行ない，デューイから受けた思想的影響の大きさを自ら語っている[(62)]。ここで示唆的なのは，1950年代台湾で教育部が主導した実験的なカリキュラム改造にもアメリカ進歩主義教育の影響がみられる点である。アメリカ進歩主義教育を背景とした1950年代台湾における実験的なカリキュラム改造については今後の課題としていきたい。

〔注〕

（1）水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書　その能力観と人間像の歴史的変遷（増補改訂版）』（東北大学出版会，2017年）259－260頁。

（2）松尾知明『21世紀型スキルとは何か　コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』（明石書店，2015年）243－247頁。

（3）Tzubin Lin, Liyi Wang, Jenyi Li and Chihming Chang, (2014) “Pursuing Quality Education: The Lessons from the Education Reform in Taiwan,” *The Asia - Pacific Education Researcher,* 23 (4), 813–22.

（4）教育部『十二年国民基本教育課程綱要　総綱』（教育部，2014年11月）1頁。

（5）家近亮子『蔣介石と南京国民政府　中国国民党の権力浸透に関する分析』（慶應義塾大学出版会，2002年）93頁。

（6）「『大学院公報』発刊詞」（高平叔編『蔡元培全集』第5巻，中華書局，1988年，所収）194頁。

（7）「我的岐路」（季羨林主編『胡適全集』第2巻，安徽教育出版社，2003年，所収）467頁。原文は「実験主義的信徒」であり，「我的岐路」（1922年6月）が初出である。

（8）例えば，今井航は1922年新学制の制定，山下大喜は1922年新学制にともなう「国語科」の成立で胡適が果たした役割を論じている。今井航『中国近代における六・三・三制の導入課程』（九州大学出版会，2010年），山下大喜「胡適と国語教育改革　―中国近代における「国語科」の創成―」（『教育学研究』第87巻第4号，2020年，所収）。Zhao Kang は，胡適は教育実践レベルでの展開がみられないとされるが，自らのデューイ理解を背景に壬戌学制など学校教育の根幹にかかわる制度の設計に尽力した面をみるべきであると論じている。Zhao Kang, (2021) “The reception and use of John Dewey’s educational ideas by Hu Shi in the Early Republic of China,” *History of Education Review*, 50 (1), 24–38.

（9）席雲舒「胡適的哲学方法論及其来源」（『社会科学論壇』2016年第6期，所収）25頁。

（10）「自序」（『胡適全集』第27巻，所収）104頁。

（11）例えば，鄭谷心『近代中国における国語教育改革　激動の時代に形成された資質・能力とは』（日本標準，2017年），野村浩一『近代中国の思想世界』（岩波書店，1990年），山口榮『胡適思想の研究』（言叢社，2000年），劉紅「胡適の実験主義の受容と思想啓蒙活動 アメリカ留学期と新文化運動期を中心に」（『法政大学多摩論集』第36号，2020年，所収），余英時『中国近代思想史上的胡適』（聯經出版，1984年），Jerome B. Grieder, *Hu Shih and the Chinese renaissance: liberalism in the Chinese revolution, 1917 - 1937* (Cambridge: Harvard University Press, 1970)，Sor-Hoon Tan, (2004) “China’s pragmatist experiment in democracy: Hu Shih’s pragmatism and Dewey’s influence in China,” *Metaphilosophy*, 35 (1), 44 – 64，Zhao Kang, (2019) “Why Did Hu Shi Introduce Deweyan Pragmatism to China as Only a Method?,” *Beijing International Review of Education*, 1 (4), 658 - 672。

（12）「十，七，十一（M.）」（『胡適全集』第29巻，所収）355頁。

（13）小林文男「近代の覚醒と「五四」 ―胡適とそのプラグマティズムの役割をめぐって―」（東亜文化研究所紀要編集委員会編『中国近代化の史的展望』財団法人霞山会，1982年，所収）118－119頁。陶行知とデューイの関係性については，川尻文彦「陶行知とデューイの訪中　―民国初期中国教育史の一側面」（森時彦編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所，2009年，所収）。

（14）前掲書余英時，47－48頁。

（15）受容史の視点について，本稿では，橋本美保「新教育の受容史とは」（橋本美保編著『大正新教育の受容史』東信堂，2018年，所収）の研究から大きな示唆を得た。

（16）阿部洋『「対支文化事業」の研究 ―戦前期日中教育文化交流の展開と挫折』（汲古書院，2004年）。同様な指摘として，元青『杜威与中国』（人民出版社，2001年）。

（17）長谷川豊「胡適とデューイ　―五四運動期中国に

おけるデューイ思想の受容―」(『日本デューイ学会紀要』第34号，1993年，所収)。

(18) 欧陽哲生「胡適与中美文化交流」(『新文化的伝統―五四人物与思想研究』広東人民出版社，2004年，所収）347頁。

(19) 平野健一郎『国際文化論』(東京大学出版会，2000年）65－76頁。

(20) 齋藤希史『漢字世界の地平　私たちにとって文字とは何か』（新潮社，2014年）162頁。

(21) 趙文静『翻訳的文化操控　―胡適的改写与新文化的建構』（復旦大学出版社，2006年)。

(22)『胡適思想批判（論文彙編)』（生活・読書・新知三聯書店，第１輯―第８輯，1955年，1956年)。1950年代における胡適批判については，山下大喜「胡適の文学論における「形式」と「内容」」(『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第67巻第１号，2020年，所収)。

(23) 例えば，日暮トモ子「近代教育（学）が持つ文化支配への対応　―中国の教育近代化におけるデューイ解釈を手がかりに―」(『近代教育フォーラム』第23号，2014年，所収)，顧紅亮『実用主義的誤読　―杜威哲学対中国現代哲学的影響』（広西師範大学出版社，2015年)，張汝綸「胡適与杜威　―一個比較思想史的研究」(『現代中国思想研究』上海人民出版社，2014年，所収)。章清は，仮に「誤読」や「誤訳」があったとしても，かえって「思想家の間の思想が完全に一致している例を挙げるのは難しい」としている。章清，森川裕貫（訳)「胡適とデューイ　―その師弟関係から見える中国近代思想の一齣」(趙景達，原田敬一，村田雄二郎，安田常雄編『講座東アジアの知識人３　「社会」の発見と変容』有志舎，2013年，所収）344頁。翻訳理論における「等価」の原理的考察については，河原清志『翻訳等価再考　翻訳の言語・社会・思想』（晃洋書房，2017年)。

(24) 佐藤豊「梁啓超の功利主義思想と明治思想」(小林武，佐藤豊『清末功利思想と日本』研文出版，2011年，所収）168－169頁。

(25) 前掲書余英時『中国近代思想史上的胡適』，48頁。

(26) 石井剛『戴震と中国近代哲学　漢学から哲学へ』（知泉書館，2014年)。

(27) コーネル大学期における履修科目と成績について，その史料考証は，席雲舒「康奈尔大学胡適的成績単与課業論文手稿」(『関東學刊』第13期，2017年，所収)。

(28)『胡適口述自伝』(『胡適全集』第18巻，所収）247－248頁。

(29) グリーンの思想体系については，行安茂，藤原保信編『T・H・グリーン研究』（御茶ノ水書房，1982年)。初期デューイとグリーンとの関係および研究史の総括については，行安茂「初期デューイの思想形成と T. H. グリーンの影響」(行安茂編著『デューイの思想形成と経験の成長過程』北樹出版，2022年，所収)。

(30) 藤井省三「胡適とニューヨーク・ダダの恋　―中国人のアメリカ留学体験と中国近代化論の形成」(『魯迅と世界文学』東方書店，2020年，所収)，周質平『胡適與韋蓮司　深情五十年（二版)』（聯經出版，2020年)。

(31) 胡適はこのエピソードを1927年１月14日にウィリアムズへあてた書信で記しており，これを英語で吐露するのは初めてであるとしている。「To E. C. Williams」(『胡適全集』第40巻，所収）246－249頁。

(32)「吾之訳業」(『胡適全集』第28巻，所収）148頁。

(33)「To E. C. Williams」(『胡適全集』第40巻，所収）117頁。

(34) 前注（10)。

(35) 前注（28)。

(36) 田浦武雄『デューイとその時代』（玉川大学出版部，1984年）40頁。

(37)「敦請杜威来華講学　―致胡適（３月12日)」(陶行知『陶行知全集』第８巻，四川教育出版社，2005年，所収）178－179頁。

(38) 一連の講演録は1919年７月に改稿および集約され，後に講演「実験主義」として『胡適文存』(『胡適全集』第１巻）へ収められた。「実験主義」の全体構成は，「一：序論」，「二：パース ―実験主義の発起人」，「三：ジェイムズの心理学」，「四：ジェイムズの実験主義」，「五：デューイ哲学の根本観念」，「六：デューイの思考論」，「七：デューイの教育哲学」，「結論」である。初出との対応関係は，「一：序論」から「四：ジェイムズの実験主義」までが『新青年』第６巻第４号，「五：デューイ哲学の根本観念」と「七：デューイの教育哲学」から「結論」までが『新教育』第１巻第３期，「六：デューイの思考論」が『新中国』第１巻第２号である。『胡適文存』へ収められた「実験主義」の構成と特質については，山下大喜「コロンビア大学期における胡適とデューイの思想的交錯 デューイ思想の受容に関する一考察」(『探究』第29号，2018年，所収)。

(39) Bruce Kuklick, *A History of Philosophy in America 1720–2000* (Oxford: Clarendon Press, 2001).

(40)「実験主義」(『胡適全集』第1巻，所収）278頁。

(41) John Dewey, *The influence of Darwin on philosophy and other essays in contemporary thought* (New York: H. Holt, 1910). デューイと進化観念，科学的方法との関係については，Henry M. Cowles, *The Scientific Method: An Evolution of Thinking from Darwin to Dewey* (Cambridge: Harvard University Press, 2020).

(42)「歴史的態度（The Genetic Method）」は，「実験主義」(『胡適全集』第1巻，所収）282頁の原文によるものである。

(43)『新教育』第1巻第3期では，コロンビア大学出身の蔣夢麟のもとで「デューイ特集号」が組まれた。胡適の「デューイ哲学の根本観念」で列挙されているのは以下の通りである。*The School and Society* (1899), *Studies in Logical Theory* (1903), *Ethics* (1909), *Influence of Darwin on Philosophy* (1910), *How We Think* (1910), *Essays in Experimental Logic* (1916), *Democracy and Education* (1916), *Creative Intelligence* (1917)。

(44) 胡適の原文が「五歩」とあることから，ここでは「五段階」と訳出している。ここで胡適が「歩」となっているのは，『思考の方法』初版ではstepsとなっていたことと関連している。ただし，デューイは1933年の改訂版において「五つの側面（phases）あるいは局面（aspects）」は固定的な「段階」ととらえることができないとしている。詳しくは，藤井千春『ジョン・デューイの経験主義哲学における思考論　―知性的な思考の構造的解明―』（早稲田大学出版部，2010年）第4章。

(45) 北京大学図書館，中央研究院近代史研究所胡適紀念館編纂『胡適蔵書目録』（第3巻，広西師範大学出版社，2013年）2244頁によれば，胡適はデューイの『民主主義と教育』初版（1916年）を蔵書として所持しており，そこにはSuh Hu, June 1916と署名がなされていたという。この蔵書目録はアメリカ留学時に胡適が『民主主義と教育』に接していたことの傍証ともなりえる。

(46)「十月卅日（星三）」(『胡適全集』第27巻，所収）214－215頁。

(47)「十一月五日（星二）」,「十一月六日（星三）」(『胡適全集』第27巻，所収）219－220頁。

(48)「十一月十六日（星六）」,「十二月廿一日（星六）」(『胡適全集』第27巻，所収）225，233頁。政治研究会の第1回の議題は「アメリカ議会」，第2回の議題は「租税」だったと記されている。

(49)「卸去世界学生会会長職務」(『胡適全集』第27巻，所収）314頁。

(50) 前注（7）。

(51) ただし，この時点でもマルクス主義に傾倒していた陳独秀との間には思想的な乖離が存在していた。横山宏章「協調と論争の友情　―陳独秀と胡適―」(『陳独秀の時代　―「個性の解放」をめざして』慶応義塾大学出版会，2009年，所収)。

(52) 安福倶楽部が圧倒的議席数を獲得したのは1918年5月から6月にかけての国会議員選挙のことである。この「新国会」について，金子肇は，「『議会専制』の危険性がもっとも現実味を持った」と評している。金子肇『近代中国の国会と憲政　―議会専制の系譜―』（有志舎，2019年）84頁。

(53) 前注（7）。

(54)「杜威先生与中国」(『胡適全集』第1巻，所収）361頁。

(55)「多研究些問題，少談些主義」(『胡適全集』第1巻，所収）324－328頁。

(56) 石川禎浩「李大釗のマルクス主義受容」(『思想』第803号，1991年，所収)，武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史　東アジアにおける「知識人」の誕生』(慶応義塾大学出版会，2020年)，森正夫『李大釗』（人物往来社，1967年)。

(57)「三論問題与主義」(『胡適全集』第1巻，所収）351頁。

(58)「新思潮的意義」(『胡適全集』第1巻，所収）699頁。

(59) 中村元哉『対立と共存の日中関係史　―共和国としての中国』（講談社，2017年)，黄克武『胡適的頓挫　自由與威権衝撞下的政治抉択』（台湾商務印書館，2021年)。

(60) 章清『「胡適派学人群」与現代中国自由主義〔全新修訂版〕』（上海三聯書店，2015年）78頁。

(61)「介紹我自己的思想」(『胡適全集』第4巻，所収）658－659頁。

(62)「杜威在中国」(潘光哲主編『胡適全集　胡適時論集8』中央研究院近代史研究所，2018年，所収)。2018年から中央研究院近代史研究所で刊行されている『胡適全集』には胡適が晩年の台湾時代に書いた論考も収録されている。

Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development (Educational Sciences)
Nagoya University, Vol. 69, No. 2 (2022 – 2023), pp.135-145.

Hu Shih's Reception and Application of John Dewey's Philosophy: As an Intellectual Basis of the New School System in 1922

Daiki YAMASHITA*

Hu Shih (1891–1962) is renowned as a key founder of the New Culture Movement in modern China. He stayed in the United States with the help of a government scholarship from 1910 to 1917. At Columbia University, he wrote the doctoral dissertation *"The Development of the Logical Method in Ancient China"* under Professor John Dewey's supervision. After returning to China, Hu Shih applied Dewey's philosophy to his own research project, and emphasized it as a method. However, few studies have examined how Hu Shih applied it to educational reform in the May Fourth period.

This paper aims to examine Hu Shih's reception and application of Dewey's philosophy as an intellectual basis of the new school system in 1922. For this purpose, the author analyses Hu Shih's statements concerning with Dewey's philosophy and his lecture titled *"Experimentalism."*

Before attending Columbia, Hu Shih encountered Dewey's philosophy through the criticism of experimentalism at Cornell University, which was affected by neo-Hegelianism. According to Hu Shih's autobiography, the influence of neo-Hegelianism here was from the genealogy of British thinker Thomas Hill Green. In that context, Hu Shih began to read Dewey's books systematically. Thus, Hu Shih came to neglect the early Dewey, who was under the influence of neo-Hegelianism. Furthermore, considering Hu Shih's lecture just before Dewey's visit to China, all the descriptions presented on Dewey were subsequent to his career in Chicago, and *"Democracy and Education"* was regarded as the representative work of his philosophy of education. Based on such a philosophical method, Hu Shih conducted his own research projects, and was deeply involved in the establishment of the new school system in 1922.

The analysis of this paper reveals two important facts about Hu Shih's reception and application of Dewey's philosophy for educational policy formation:

1)Hu Shih conveyed Dewey's philosophy to China with his friends, who also studied pragmatism at Columbia University. He came to greatly emphasize Dewey's philosophy as a method, especially because of the ideological opposition and arguments with Marxist theory.

2) Hu Shih was a core policymaker for establishing the new school system in 1922 with the background of Dewey's philosophy. He applied it to educational policy formation as a social reconstruction, and Dewey recognized these new systems as a great step forward in education for new China.

---

* Former Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University